

2018年教育の行き先 他国からみる英語教育の比較

英語教育に注目が集まり始めて久しいですが、日本人の英語能力は伸び悩んでいます。世界116か国で語学教育事業を展開するEF（イー・エフ・エデュケーション・ファースト）が作成した「EF EPI英語能力指数2018年版」では、日本は全88か国中49位という結果でした。2011年には全44か国中14位であったものの、その後順位を落とし続けています。そんな中、日本と同じアジア圏にありながら、高い順位に位置している国々もあります。韓国やベトナムやインドなどの国々です。今回は、日本の英語教育について考えるため、インドの英語教育を比較対象として取り上げます。

1. インドにおける英語の歴史的背景

インドは長くイギリスの植民地でした。インドがイギリス支配下にあった時代、国民は英語の使用を強要されていました。独立後はヒンディー語が正式な公用語になりましたが、英語も準公用語として使用されています。インドでは他にも多くの言語が使用されています。しかし、現在では、世界共通語である英語に対する教育の強化が、インド全体で広まっています。

2. インドにおける英語の幼児教育

インドの未就学児は、プレスクールと呼ばれる幼児教育機関に通ったのち、初等教育を受けるのが主流です。ここでの使用言語は主に英語です。ヒンディー語に慣れ親しんでいる子どもたちも多くいますが、授業を受けるうちに、自然と英語を身につけることができます。

幼少期（3～4歳）の英語教育は、「フォニックス」に焦点を当てたものが多いです。「フォニックス」とは、英語の「音」を「文字」に結びつけるためのルールです。このルールを身につけることで、知らない単語に出会っても発音することができるようになります。「文字」からではなく、「音」から英語に親しむ教育により、ネイティブが母国語を身につけるのに近い形で英語を習得できるのです。

また、プレスクールでは、教師の質も非常に高いです。スクールは教師の学歴を公開しており、親たちは、スクールの教育方針・教師の経歴・マネジメント及び、口コミなどからスクールを厳選します。その結果、プレスクールの競争率が上がり、質の向上につながるため、子どもたちはよりよい環境で教育を受けることができるのです。

3. インドにおける初等・中等教育事情

インドの公立小中学校では、主にヒンディー語で授業が行われますが、一部の学校では英語で授業が行われています。また、特に中心都市では、子どもたちを私立学校へ通わせる家庭も多く、私立のほとんどの学校では英語で授業が行われています。このような事情から、初等・中等教育への足がかりとして、プレスクールでの英語教育の強化がなされているのです。

4. インドの職業事情

インドではIT産業が盛んです。その理由の1つに、インドの地理的優位性があります。アメリカで開発されたソフトウェアを、12時間の時差があるインドへ夜のうちに送り込むことにより、休むことなく開発が進められるのです。このように、英語圏の人々と共同で仕事を行うため、「英語ができること」がIT産業界で仕事を行える必須条件になります。国内に留まらない職業事情が、英語教育への関心を高めているのです。

日本では2020年から小学校で英語が教科化します。まず、小学3・4年生で「外国語活動」として、そして、5・6年生「教科」として英語を学んでいきます。小学校から英語教育をスタートすることにより、小学校から大学入試までの一貫した英語教育が期待されていますが、インドの英語教育と比べると、圧倒的にスタート時期が遅いと言えるでしょう。また、英語が実生活に関わっておらず、あくまで「教育」の範囲に留まっていることも英語能力向上につながらない原因かもしれません。英会話教室や家庭学習教材を利用して英語に触れあうことはできますが、日本全体として、英語教育に対する意識を高める必要があるでしょう。（文/学林舎編集部）

2018年教育の行き先 学習進度、飛び級に関して考える

公立の小中高校の学習進度は、文部科学省によって学年ごとに細かく定められています。よって、その生徒の学年を聞けば、「何を勉強しているのか」がおおよそ把握できます。一方で、塾では昔から「先行学習」として学年にとらわれない学習進度がとられてきました。また、最近の私立の中高一貫校などでは、中学1年生から高校2年生までの間に、中学・高校の6年分の学習内容を全て学び終わり、高校3年生の1年間でしっかり受験対策を行うなど、独自のカリキュラムをとっている学校もあります。そして、全国で指定されたわずか7校においては、生徒の成績によって、高校生が大学に飛び級で進学することが認められています。このように、近年、学習の進め方が少しずつ多様化しています。

諸外国では、年齢に関係なく優秀な人材が大学へ進学できる「飛び級進学」の制度が、日本より浸透しています。内閣府の資料によると、13~15歳の子どもが在籍している学校の内訳は、日本ではほぼ100%が中学校や高校です。しかし、韓国やアメリカ合衆国などでは、必ずしも学年と在籍校は日本のように対応していません。前述したように、日本にも一部飛び級進学はありますが、「高校に2年以上在学したこと」などが大学進学条件になっているため、基本的に13~15歳の子どもが大学に進学することはできません。このように、日本の子どもは、諸外国の子どもにくらべて、個々の能力に応じて自由に学習進度を選べないことがわかります。

では、公立の小中学校で先行学習や飛び級が認められない根本的な原因は何なのでしょう。それは、日本の年齢主義社会です。日本では、6歳から15歳までは小中学生、16歳から18歳までは高校生、18歳から22歳までは大学生と、年齢によっておおよその学年がわかります。これは、誰もが大きな差のない教育を受けることができるという点では良いですが、一方で個人の能力や個性に合わせて学習進度を調整することは難しい

です。また、社会人になってもその人の年齢を聞けば「もうすぐ定年ですね」などと思う人も多く、人生のライフイベントと年齢が強く結びついています。このような日本の年齢主義社会は、グローバル化や情報化が進み、変動が激しい時代をむかえるにあたって変化しなければ、世界の国々と肩を並べていくことはきびしくなると考えられます。

今後は、公立の小中学校でも、生徒一人一人に合った学習指導を積極的に行えるように、制度を整えることが急務です。まず、私たち一人一人が、年齢主義にもとづく教育に対して、疑問をいただくことから始めましょう。(文/学林舎編集部)

◎年末年始営業のご案内

誠に勝手ながら、弊社の年末年始の営業は、年内の営業が12月28日(金)までです。年始の営業が1月7日(月)からとさせていただきますことご了解ください。

12月28日(金)午後2時以降のご注文に関しては、1月7日(月)発送とさせていただきます。

皆様にはご迷惑をお掛けしますが、何卒ご容赦願います。

学林舎 北岡 響

クロスロード Crossroad

第 88 回 文 / 吉田 良治

平成最後の一年

平成30年もあと残りわずかとなりました。今年は今上天皇の譲位により、平成最後の年となりました。来年は4月30日に天皇譲位、翌5月1日に現皇太子が天皇へ即位され、年号も新しくなります。

この30年間国内外で大きな変化がありました。平成元年はドイツのベルリンの壁が崩壊し、2年後ソビエト連邦も崩壊し、東西冷戦が終わりました。それに代わって湾岸戦争やアメリカ同時多発テロ、イスラム国による世界規模のテロといった、新たな形の紛争がおこりました。国内でもオウム事件は、現在世界で起こるテロのモデルとなりました。

国内外の経済もバブル崩壊やリーマンショックにより、景気後退の要因となりました。また阪神淡路大震災や東日本大震災など、国や災害被災地の経済や社会生活に、大きなダメージを与えました。平成の時代は地球規模の温暖化も深刻化し、毎年大規模な自然災害を巻き起こしています。平成最後の“今年の漢字”に選ばれたのも“災”でしたので、ある意味平成を意味する言葉なのかもしれません。

こう考えると平成はあまりいい出来事が起こらなかったような気がします。元々元号に“平”という文字が使われたのは、平安末期の“平治”以来でした。

“平治”が混乱の時代ということもあって、“平”という文字を元号に使われない慣例だったと聞きますが、その慣例を破って平成という元号になったのですが、平成が終わろうとしている今、やはり“平”という文字が入る元号ジंकスは、当たっていたのかもしれない。

平成30年間で社会生活は大きく変わりました。携帯電話の普及は平成という時代を象徴するものでしょう。最初は単純に通話する機能から、メッセージを送るメール機能、インターネット閲覧と、その機能が進化していきました。今や一人一台が当たり前になり、スマートフォン1台で電話やインターネットはもちろん、音楽を聴く、動画・静止画の撮影、音声録音、読書など様々な用途で使われています。そしてショッピングなどの支払いやコンサートの入場や交通機関の乗車など、これですべて済んでしまう時代になりました。一方、コミュニケーションは直接会ってやり取りをしなくても、容易にできるようになりました。電話やメールはもちろん、スマートフォンの機能を駆使すると、SNSなど個人で簡単に発信が可能となり、既存メディアよりも早く発信ができるようになりました。SNSが先に情報伝達し、既存メディアが後追いで発信するといった、逆転現象も起こっています。また、これまでまず知ることのないような情報も、簡単に手にする機会も増えています。

そしてAI・人工知能の時代に入り、これまで人がしていた仕事がどんどんAIに取り替わることになり、人ができる新たな仕事の創造と、それに適応することが求められます。昭和の時代SF映画で見た世界がどんどん現実になっています。

急速に進化していく新しい時代を生き抜くために、新しい時代に合ったライフスキルをどう育むのかが問われています。そこで一つカギになるのは、読書ではないかと思います。人間の最大の強みは思考力です。思考を鍛える一番の術は読書にあります。近年大学生の読書時間の減少が危惧されています。子供のころからの読書習慣を大事にすること、スマートフォンでもできることですので、若者や子供に新しい時代を生き抜くために、読書習慣を持つ機会を作ることが、大人の最大の責任と感じます。(つづく)